

日本の国策は「ミシテン員尾崎秀美からドイツ紙特派員ゾルゲを通過し連に筒抜けだった

近衛文麿は公家でありながらマルクス主義に傾倒し、京大の河上肇教授からマルクス主義経済学を学ぶために東大から京大へ転学した。そして総理となるとブレインとして昭和研究会や朝食会の政策集団を結成したが、これらの参加者の中には企画院事件や横浜事件などで共産主義者として逮捕された革新官僚や進歩的学者、記者などが多数おり、特に朝食会にはゾルゲ事件で逮捕された尾崎秀実、西園寺公一、大養健などがいた。

近衛はこれらのブレインの影響を受け大政翼賛会を立ち上げ、「蔣介石を相手にせず」との声明を発し、「三国同盟を締結し南仏印に兵を進めるなど、日本を太平洋戦争に大きく前進させてしまった。しかも近衛が決めた国策は尾崎秀実から、ドイツの新聞記者で、赤軍情報部員リヒャルト・ゾルゲに伝えられ、ゾルゲは駐日大使オットやヴェネネー海軍武官に確認をとり主スクワに報告していた。オット大使（元駐日陸軍武官）やヴェネネー武官は一回目の日本勤務であり、日本は、この

しかし、この危機はゾルゲの次の一連の情報で救われた。七月二日にドイツが勝てば日本もソ連を攻撃するとの方針を決めたとの情報を尾崎から得ると、ゾルゲはオット大使に確認し「オット大使によれば、ドイツ軍がスベルドロフスクに到達する時点で、日本は戦闘を開始するだろうと同じことを言った。また駐在武官は日本が遅くとも七月か八月の始めには戦争に参加するだろう。準備次第、直ちに戦争に参加すると確信している」と語ったと報告した。

次いで九月一四日には「オット大使の意見によると、日本の対ソビエト攻撃は今ではやや問題外であり、日本が攻撃可能なのはソ連が極東から軍隊を大規模に移動させる場合だけであろうと報告した。この報告を受けるとスターリンは、二〇個師団を極東からモスクワ周辺に移動させ、それが窮地にあったソ連軍を救い、ヒトラーのその後の戦争指導を大きく狂わせ、日独敵北の大きな要因ともなった。

尾崎が国を売ったのは、ただひたすら世界共産主義体制を実現したかったら……

なぜ、尾崎は国を売ったのであろうか、それは尾崎が「働く者の祖国コミ

### 世紀のスパイ・ゾルゲと獅子身中の虫・大島浩駐在大使

## 最後の最後までドイツ首脳との連絡を維持し信頼関係を保持し続けた それゆえに、克明に情報が漏洩してしまった歴史のアイロニー



平間洋一(ひらま よういち)  
●歴史学者。元海軍補。元防衛大学校教授。1933年5月神奈川県横浜出身。1957年防衛大学校(電気工学科)卒。1957年海上自衛隊に入隊。1958年3等海尉任官、同幹部学校指揮専攻課程、護衛艦「ちとせ」艦長等を経て、1988年退職(海尉補)。同年より防衛大学校講師、教授を経て1999年退職。現在は軍事史学会理事、兵市海事歴史科学館(大和ミュージアム)委員、横浜資質歴史編纂委員などを務める。  
1996年、慶応義塾大学より博士(法学)取得。著書には、「戦後大和鋼鉄社選集メチエ269(編著、講談社2003年)、「日独戦争が変えた世界史」(単著、芙蓉書房出版、2004年)

# ヒストリカル アイ

NEW COLUMN  
BY Youichi Hiramura  
volume 3

米国統合情報教範にある情報の第一原則は「知る必要のある人にだけ知らせ」と書いてある。ここにある原則を遵守していれば、あるいは、戦局は大きく変わっていたに違いない。日本とドイツの情報がロシアや他国に漏れてしまったのはこの鉄則を守れなかったからである。とりわけ、こうした情報を守り抜いていくのが困難であったに違いない。歴史の転換期に何が起ったのか。《情報》をキーワードに検証してみたい。

二人の紹介からゾルゲを信頼していた尾崎の主張した「南部ベトナム進駐」論に同調してしまっただ近衛首相

独ソ戦が始まると尾崎はドイツと共同してソ連を攻撃することは、「近視眼的な誤った行動である。なぜなら、もしドイツがソ連を破れば日本は指一本挙げないでもシベリアは日本の懐にころがりこむからである」。「南方こそは進出の価値ある地域であり、南方にこそ日本の発展を阻止しようとしている敵がいる」と南部ベトナムへの進駐を主張し、近衛や陸軍に進言した。

この尾崎の主張に動いたのが近衛首相であり、陸軍省の軍務局であった。六月六日に大島大使から独ソ開戦概ね確実との電報を受けると、陸軍省は「断平南方に武力進出すべきである」と主張し、国策を平和的南進から武力南進に変え、米国の石油輸出禁止を招き日本を、太平洋戦争へと導いた。

### ゾルゲの一連の報告で救われた スターリン政権崩壊の危機

一方、陸軍参謀本部は独ソ戦がドイツに有利に展開すればシベリアに打って出ようと、関東軍特殊動員演習を実施したためスターリンは動転した。

そして敗北したのであった。

### 大島大使のヒトラーへの信義、ドイツの大島大使への信頼が皮肉にもドイツを裏切り、不利をもたらす結果となった

日独両国は相互に人物の往来による連絡が不可能なため多量の電報を発信したが、これらの電報が連合国に解読されドイツの戦争指導や内情まで多くの貴重な情報を連合国に与えてしまった。特に「私はドイツ政府・ドイツ大本営と最後まで密接な連絡を維持することを第一の目的としているので、諸外国の外交団のように爆撃や戦争の危険を避けるために安全な場所へ移動させないで欲しい」と、最後までドイツ首脳とともに行動した大島大使へのヒトラーの信頼、長年の間に築き上げた人間関係に基づくとドイツの大島大使への信頼が、結果的にはドイツを裏切りドイツに不利をもたらしてしまっ

た。このように日本は尾崎の描いたシナリオの通り、中国を共産化するために日中戦争を長期戦に引き延ばされ、太平洋戦争へと引き込まれ

### 情報保全の徹底とは、米軍情報教範が教える「Need To Know」の徹底

ロナルド・ルウィンは「日本の暗号を解説せよ」で、大島大使の通信はヒトラーやその腹心の部下らとの内輪の会話を直接報告しているところが貴重であった。双方の会話を読めばドイツ

側が何を強調し何を隠し、何を東京に伝えようとしているのが一目瞭然であった。軍需物資の欠乏状態を告げるペルリンー東京間の通信には、ドイツ経済の困窮ぶりがよく表われていた。特に貴重だったのは四三年秋にイタリア軍が総崩れしたのち、ヒトラーが連合国がイタリア北部へ進撃するか、バルカン半島に上陸するか不明だが自分は後者だと思ふ。このためイタリアには一八個師団を置くが、ギリシャには二〇個師団を配備すると語ったとの情報で、この情報が攻撃正面をイタリアにすることへの決断を助けたという。また、四三年二月一〇日の九頁に及ぶ大島大使の大西洋岸防衛状況視察報告は、指揮組織、師団数、部隊配慮などの貴重な情報を提供したが、さらに西竹一中佐の現地視察報告は、大砲の種類や数量、対戦車砲の数や位置など、まさに天祐であったと述べている。大島大使が駐在武官、大使と二回のドイツ勤務を通じて築き上げた信頼が、ドイツにとって背信の結果をもたらしたのであった。情報の保全に必要なものは情けにもろい日本人には苦手であるが、米国防統合情報教範が教える「Need To Know」(必要な人だけに知らせ)の徹底ではないであろうか。あ